

## 豊かな言葉の行き交う授業に

京都女子大学教授 吉永 幸司  
よしなが こうじ

一 生きて働く言葉の力を育てる

朝の登校風景。地域の子どもと挨拶<sup>あいさつ</sup>を交わす。

「ぼんは、大きい声で挨拶ができるよい子だね。」

と、おじさんからほめられた子が、うれしそうに学校に向かつて走っていく。

昼休みの職員室。先生を訪ねてきた子に、

「用件がすっかりと話せましたよ。」

と、まわりの先生から声をかけられほめられている。声が大きいい、用件を丁寧に話すというそれだけで、繰り返し、ほめられ認められている。

一方、この逆もある。

「もっと大きい声で話さない。」

「分かりやすく言いなさい。」

と、家でも学校でも注文をつけられ続けている子である。小さく見えるこのような経験の繰り返し、子どもの生き方にまで響くといえは言い過ぎだろうか。

二 授業における子どもの言葉を見守る

言葉の力を育てる国語の授業の始まりは、子どもの学びを見つめることからである。よい考えを発表しているのだが、声が小さくて考えが広がっていかない。そんなとき、

「もう少し大きな声で発表しようね。」

「ゆっくり、分かりやすく話してね。」

と、指示をしたり、助言をしたりすることが日常的である。

このようなとき、言葉の力を育てるということから、少し視点を変えて、

「発表の音が聞こえていないはずなのに、聞いている子はどつして、そのことを話し手に伝えないのだろう。」

「よい発表なのに、反応しないのはどつしてだろう。」

と子どもの心の奥を見ていく。そうすると、質問の仕方を知らないとか、気持ちの伝え方が分からないという実態が見えてくる。

「先生だったら、おしまいのところを聞こえにくかったのでもう一度言ってくださいとお願いするよ。」

と、話し方、聞き方の手本を示す。それを真似たり生かしたりして、子ども同士で言葉を交わし合う授業。

その結果は、教師が、

「大きい声で読みましょう。」

「よい考えです。」

と子どもの発言を先取りしていたときより生き生きと、そして、確実に言葉の力が育つ授業になる。

三 豊かな言葉が響き合う教室を

音読の授業で、多くの子が読みたいと挙手をした。



はきはきと話せる、用件を的確に伝える力を育てるのは国語の授業である。生き方に響く、確かで、豊かな言葉の力を育てる授業であつたかどうか、見直したいと思う。

その中で指名された子が「ありがと。」と言ってから読み始めた。

「読みたい人がたくさんいる中でほかを読ませてもらうから。」

とその理由を述べた。

「友達の考えから、新しい見方ができるようになった。」

「発表を真剣に聞いてくれたので、うれしかった。」

という気持ちと言葉が行き交う教室であつてほしいと思う。